

日本考古学における「戦争」研究の動向

はじめに

日本考古学において、「戦争」という語が論文や書籍の題目などに広く用いられたのは、おおむね一九九〇年を前後する頃からといえそうである。佐原真氏が精力的に推進した、人類史的視野に立つて「戦争」の起源を追求する一連の研究の開始^①が、その土壌を形成したものと考える。そうした下地の上に、国家形成をめぐる議論において「戦争」をその主要因とする学説^②が注目され、国家段階の指標として軍事組織の成立が着目されたこと^③や、第二次世界大戦での敗戦から五十年という節目の一九九五年から二年にわたり、考古学研究会第四一・四二回総会の統一テーマとして「戦争と考古学」が掲げられたこと^④などが大きく作用したのであろう。また、同じく一九九五年から国立歴史民俗博物館で共

同研究「人類にとって戦いとは」が、霊長類学・自然人類学・文化人類学・民俗学・考古学・古代史・中世史・近世史・近代史・現代史による「戦争」の学際的研究として開始され、その成果が展示や書籍にまとめられたことも^⑤、考古学によって「戦争」を研究することの必要性や重要性を一般に周知する役割を果たしたといえよう。

もちろん、それ以前から、「戦い」・「争い」・「抗争」などを射程に入れた研究には膨大な成果が蓄積されてきていた。また、「戦争」という語を積極的に取り上げた研究例も認められる^⑥。一方で、近年では「戦争」という語を用いながらも、それが示しているものが「戦い」・「争い」・「抗争」などとは実質的にどのような異なるのか、明確ではない場合も多い。その区分は「戦争」をどのように定義するかにかかっており、裏を返せば、「戦争」の

阪 口 英 毅

定義にまで言及して議論を進めている研究例は稀といえる。

本稿では、まず先学による「戦争」の考古学的定義を確認し、それを踏まえて「戦争」の研究方法を概観する。さらに、「戦争」研究の中でも多くの蓄積があり、かつ活発な議論がおこなわれてきた二つのテーマの概要を示すことによって、日本考古学における「戦争」研究の動向を提示することを目指したい。また、先述したように「戦争」の学際的研究が成果をあげている現在、日本考古学における「戦争」研究の特質や現況を、ほかの分野の研究者に提示することが求められるのではないかと考える。「考古学は過去人類の物質的遺物（に拠り人類の過去）を研究するの学なり^⑦」とする立場から「戦争」とどのように向き合っているのかを紹介することも、あわせて目的としたい。

- ① 佐原真「戦争の考古学」『図書』四九四号（一九九〇年八月号）、岩波書店、一九九〇年、二一七頁（戦争はいつはじまったか」と改題、田中琢・佐原真「考古学の散歩道」岩波新書（新赤版）三二二、岩波書店、一九九三年、一六二—一七三頁、に再録。「初め戦争はなかった——考古学からみた戦争の歴史——」「一粒の粃」定期講演会講演録第二集、学習院大学考古学研究会、一九八八年（戦争と平和」と改題、「考古学千夜一夜」、小学館、一九九三年、に再録。本稿では小学館ライブラリー版、一一四二頁、を参照）。

- ② 次の文献に簡潔にまとめられている。植木武「闘争・戦争モデル」『国家の形成 人類学・考古学からのアプローチ』三二書房、一九九

六年、一二九—一六七頁。

- ③ 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説——前方後円墳体制の提唱——」『日本史研究』第三四三号、日本史研究会、一九九一年、五—三九頁、など。

- ④ 『考古学研究』第四二巻第三号・第四三巻第二号、考古学研究会、一九九五—一九九六年。

- ⑤ 国立歴史民俗博物館（監修）『人類にとって戦いとは』一—五、東洋書林、一九九二—二〇〇二年。国立歴史民俗博物館（佐原真・藤尾慎一郎）（編）『倭國亂る』、朝日新聞社、一九九六年。

- ⑥ 水野清「せんそう 戦争」『図解 考古学辞典』、東京創元社、一九五九年、五七五—五七六頁。佐原真「かつて戦争があった——石簾の変質——」『古代学研究』第七八号、古代学研究会、一九七五年、二六—三〇頁（金岡恕・春成秀爾（編）『戦争の考古学』佐原真の仕事四、岩波書店、二〇〇五年、三六—四六頁、に再録）、など。

- ⑦ 濱田耕作『通論考古学』、大鏡閣、一九二三年。

一 「戦争」の定義

「戦争」の一般的な定義を国語辞典に求めるならば、「〔一〕武力を用いて争うこと。特に、国家が自己の意志を貫徹するため他の国家との間で行う武力闘争。〔二〕激しい競争や混乱^①」などとなるが、これはあくまでも現代の日常用語としての「戦争」であり、これをそのまま考古学的定義として用いるわけにはいかない。これまでも多く指摘されているように、学問の性質や資料・方

法論の違いによって、「戦争」はさまざまに定義されうる。佐原真氏が例示したように、文化人類学の福井勝義氏は、「組織があって命令（指揮）と服従の関係をもつ集団と集団の争い」と「戦争」を定義したが、「命令と服従の関係を考古学的に証明することは難しい。これに続けて、佐原氏は「戦争」の考古学的定義を「多数の殺傷をともし得る集団間の武力衝突」とし、さらに「考古資料にもとづいて認めることのできる」という修飾句をつけた方が安全かもしれないと述べている。

松木武彦氏は、「戦争」の一般的定義を「集団間の組織的な武力衝突」とした上で、文化人類学の福井氏による戦い（conflict）の分類を参照し、その「戦争」（war）を「異なった政治統合をもつ集団間における組織的武力衝突」と規定する見解の有効性を認めている。それに加えて、考古学による分類や定義には「その出現や変質・発達の過程など、より通時的かつ歴史的な視点が重視される」こと、「考古学的証拠を積み重ねて戦いの存在自体を実証し、その具体的様相を復元する方法と作業とが、前提として必要である」ことを指摘した^⑤。

ここに示した二例は、「戦争」の考古学的定義の代表例と思われるが、いずれも「戦い」・「争い」・「抗争」など、「戦争」をも含み込む、より包括的な語の説明としても、おおむね該当する。

すなわち、ほかの語と区別して「戦争」を一对一对応で説明する定義とはなりえていない。定義から「戦争」の十分条件となる要素を積極的に採したとしても、「集団間の」という部分を抽出しうる程度であろう。「集団」の内容については、松木氏のように「異なった政治統合をもつ集団」とする文化人類学的定義を採用する立場もあるが、「集団」の政治統合のあり方を考古学的方法によって厳密に認識することは、多くの場合において困難であろう。また、同様に「集団」の規模や性格を認識することも容易ではない。このことは、そうした要素と深く関連する、「武力衝突」や「闘争」の規模の大小を、「戦争」の定義に反映させることが困難なことを意味する。現代の日常用語がもつイメージからすれば、小規模な武力衝突や闘争を「戦争」と呼ぶことは躊躇を覚えるものの、これらを区分する明確な指標を示すことは難しいということになる。以上にみてきたように、「戦争」を考古学的に定義しようとすると、「物質的遺物」による実証が困難な要素を削ぎ落としていかなるをえないために、どうしてもほかの語との区別が明確ではない、曖昧な定義となってしまう。

このことを踏まえると、あえて考古学的な定義を示さず、現代の日常用語の延長線上で「戦争」という語を用いる立場にも、一定の合理性を認めることができるだろう。町田章氏は、「戦争」

の本質は「暴力による自らの意志の貫徹」にあるとし、「戦争」を「集团的、意図的かつ組織的な一つの闘争」とする一般的定義を提示することから議論をはじめている。^⑤その上で「日本歴史のなかで考古学的な観点から戦争行為を実証することは必ずしも容易ではなく、基本的には傍証と推測の域を脱することはできない」とする一方、「文献史料ではとらえがたい物質的な遺跡・遺物を通じて、戦争の実体をより視覚的に理解することは可能である」と述べ、考古学的研究の役割をいくぶん限定的なものとしてとらえている。東潮氏は、「戦争」を「諸利害の対立として、部族・種族・民族・国家間などの諸集団間において発生する」「政治的交通関係」とし、その形態を「共同体（種族・部族・地域集団）間の戦争」・「国家内部の戦争」・「国家・民族間の戦争」の三つに分類した。^⑥東氏が例示する「磐井の乱」や「白村江の戦い」などのように、文献史料に記録されるほどの武力衝突を表現する語としては、「戦争」は現代の日常用語的なイメージに合致しているといえよう。

ここまで、先学による言及を参照し、「戦争」の考古学的定義がやや明確性を欠くものとならざるをえないこと、それを踏まえれば考古学的定義を措定しない立場にも一定の合理性が認められることを確認した。その上で、次章以降の用語の前提とするため

に、あえて本稿における「戦争」の考古学的定義を示しておく。ここでは、佐原氏と松木氏による定義を組み合わせて、「戦争」を「考古資料に基づいて認識することが可能な、集団間の武力衝突」と定義する。ただし、この定義による「戦争」には、先にもふれたとおり、現代の日常用語としての「戦争」がもつイメージからすれば小規模と思われる武力衝突をも含むこととなる。したがって、先学による研究例を参照するにあたっては、「戦争」という語を使用していなくとも、ここでの定義に合致する「戦い」・「争い」・「抗争」などに関連したものであれば対象とする。本稿において、煩雑ながらも「戦争」と括弧をつけて表記する理由は、ここにある。

① 松村明（編）『大辞林』第三版、三省堂、二〇〇六年。

② 福井勝義「戦争」『文化人類学事典』弘文堂、一九八七年、四二四—四二六頁。

③ 佐原真「日本・世界の戦争の起源」「戦いの進化と国家の生成」人類にとって戦いとは一、東洋書林、一九九九年、五九—一〇〇頁（金関恕・春成秀爾（編）『戦争の考古学』佐原真の仕事四、岩波書店、二〇〇五年、一〇二—一四八頁、に再録）。

④ 福井勝義「戦いからみた部族関係——東アフリカにおけるウシ牧畜民 Bodi (Mekén) を中心に——」『民族学研究』第四八巻第四号、日本文化人類学会、一九八四年、四七—一四八五頁。それに対して、「紛争」(Gang)を「同一の政治統合をもつか、あるいは共通の世界

を有する集団内における争いで、当事者間で解決されるメカニズムをもつもの」とする。さらに、「戦争」・「紛争」と区別されるべき概念として、「略奪」(raids)を「相手の人間や財産の入手を目的とした集団間の武力衝突」、「殺戮」(killing)を「相手の個人または集団に対する致命的武力行為」とする。

⑤ 松木武彦「戦争」「用語解説 現代考古学の方法と理論Ⅰ」、同成社、一九九九年、一三二―一三九頁。

⑥ 町田章「総論―戦争」「考古学による日本歴史」六 戦争、雄山閣出版、二〇〇〇年、七―一三頁。

⑦ 東潮「朝鮮三国と倭国」「考古学による日本歴史」六 戦争、雄山閣出版、二〇〇〇年、三七―五一頁。東氏は、「親征・巡狩・巡撫、食料の賑給、種粳の賑給・賑恤なども、戦争・支配にかかわる政治的通関係である」とするほか、「都督諸軍事号や朝貢・冊封関係、軍事同盟なども権力関係であり、戦争状態にはかならない」とし、「戦争」を幅広くとらえている。

二 「戦争」の研究手法

研究対象としての「戦争」の二相 前章でみた町田章氏の見解にも示されるように、考古学的方法によって「戦争」の実態を明らかにすることは容易ではない。とくに、「戦争」の個別事例について、その全体像を具体的に復元することは難しい。一つの「戦争」はその発生から収束までに、平時・危機・戦時・終結・戦後といった局面を経過するが、そのうち考古学的な痕跡、「物

質的遺物」を残しうると想定できる局面は、きわめて限定される。もつとも重大な局面と考えられる「戦時」を例とした場合でも、武力衝突の舞台が防御施設などであればまだしも、構築物をとまなわなない場所で開催された武力衝突については、その存在を推定しうるような遺構・遺物の出土状況は、とくに古代以前ではきわめて稀といえよう。こうしたことから、「戦争」の個別事例について、その展開過程を直接的に明らかにしようとする方向性の研究は少ない。ただし、文献史料に記録が残る「戦争」についてはこの限りではなく、例えば「倭国乱」をめぐる議論は、弥生時代の実年代論とも運動して活発におこなわれてきた。しかし、考古資料の現況からは、むしろ「倭国乱」という記載から想定されるような大規模な武力衝突の直接的な痕跡は当該時期に認めがたいとの指摘がなされている。^①

その一方で、「戦争」は政治・経済・技術・文化など、社会における広汎な人間活動が複合的に関係する重層的な現象であることから、関係領域の裾野は広大であり、それだけアプローチの方向性や方法も多様に設定しうる。さまざまな方向性や方法により、個別事例としての「戦争」ではなく、一般論としての「戦争」、あるいはいくぶん時代や地域などを絞った「戦争」を対象とする研究が主流であるといえる。また、「戦争」に関連する考古資料

を扱ってはいいても、正面から積極的に「戦争」に言及することを目指すとはしない研究も多い。

「戦争」の存在を示す考古資料 個別事例としての「戦争」

であれ、一般論としての「戦争」であれ、前章で措定した「考古資料に基づいて認識することが可能な、集団間の武力衝突」との定義のもとでは、遺構・遺物として遺存した考古資料を基礎として研究を進めることとなる。すなわち、どれほど抽象的・観念的な議論であったとしても、もつとも基礎となる部分は「物質的遺物」に支えられていなければならない。「武力衝突」が存在したことを示す考古資料については、佐原真氏による整理が著名であり、「一 守りの村・町・都市」、「二 人の殺傷を専用とする道具、武器の存在」、「三 殺傷のあとをのこす人骨」、「四 武器をそえた墓」、「五 武力崇拜をしめす祭の道具・施設」、「六 戦い・戦士を表した造形作品」が列挙されている。これらのうち、一・四・六は武力が恒常的に存在し、それによる階層分化をも想定しうる社会の所産と考えられることから、「集団間の武力衝突」すなわち「戦争」の存在を反映する考古資料とみてよいだろう。二・三は、そのみでは「集団間の武力衝突」の存在を示すわけではなく、その出土状況や数量を加味して評価する必要がある。しかしながら、この二者はもつとも直接的に「武力衝突」の

痕跡を残す資料であり、資料操作が適切におこなわれるならば、きわめて雄弁な成果を期待できる。これら六つに整理された考古資料は、もともと佐原が「ヒトはいつ戦い始めたか」を追求する中で提示されたものであるために、その初現形態に焦点が絞られた表記となっている。しかし、そうした部分を捨象し、それぞれの考古資料としての特性を抽象した分類として翻案するならば、「戦争」の存在が明確な時代の「戦争」を検討していく上でも、有効な枠組といえよう。

それぞれの考古資料について、実際にどのような研究例があるかを瞥見しておく。すべてにわたって取り上げることとはできないため、おもに筆者の関心にそって例示する。一については、弥生時代の環濠集落・高地性集落が代表的であるが、「村・町・都市」と限定せずに「施設」とするならば、古墳時代の首長居館^④、古代の朝鮮式山城・神籠石^⑤、中・近世城郭^⑥など、時代ごとにさまざまな例をあげることができる。また、近・現代については、一九八〇年代以降に本格化した戦跡考古学において、防御施設のみならずさまざまな軍事関連施設が対象とされている。二については、詳細にみれば枚挙にいとまがないが、弥生時代の石製・鉄製武器、古墳時代の鉄製武器・武具^⑦や馬具^⑧などを扱ったものが、広義の「武器」の研究例として代表的であろう。しかしながら、そ

の大多数は、それらがどのように「戦争」に用いられたかという機能面よりも、その変遷や生産・流通などの様相を明らかにしようとする問題意識に比重を置いている。三については、形質人類学との協業がなされており、弥生時代北部九州の殺傷人骨についての研究の蓄積が著しい^⑩。中世では、新田義貞による鎌倉攻めの際の犠牲者を含むとされる、材木座海岸で発見された人骨群が著名である^⑪。四については、弥生墳丘墓や古墳における武器副葬をめぐる検討がさかんにおこなわれている。二による成果を踏まえて、対象とする時代の武装・戦術・軍事組織などにまで踏み込んだ研究もなされている^⑫。五については、弥生時代の青銅製・木製・石製などの武器形祭器がただちに想起される^⑬。ただし、武器形祭器の「武力崇拜」の側面に軸足を置いた研究は、それほどおこなわれていないようである。六については、武人埴輪などをあげうる。また、直接的に「戦い・戦士」を表すわけではないが、盾形・甲冑形・鞆形などの武具形の器財埴輪もそれに類するものといえよう。ただし、これらについても「戦争」との直接的な関連を射程に入れて検討された例は少ない^⑭。また、海外の考古資料ではあるが、高句麗古墳壁画にみられる出行図は、古墳時代の武装や軍事組織を検討する際に参照されることがある^⑮。

「戦争」研究の方向性・方法 先にもふれたように、これら

の考古資料を用いての、「戦争」研究の方向性や方法は多様である。それらを網羅的・体系的に類型化することは難しいが、概括的には次の三つに区分できると考える。

第一に、製作技法・型式変化・編年・分布などのオーソドックスな考古学的検討により、考古資料そのものを時間的・空間的に位置づけようとする類型である。もともと基礎的な研究ということができ、多くの割合を占める。「戦争」との直接的な関連を射程に入れない研究例も多い。第二に、第一の類型に属する研究例を基礎としてさまざまな資料操作をおこない、形而上の概念も含めて「戦争」の諸相を追求しようとする類型である。ここでのいう諸相には、一般論としての「戦争」をはじめ、武装・戦術・軍事組織といった「戦争」の各局面を構成する諸要素や、個別事例としての「戦争」の要因・展開など、「戦争」に関連するあらゆる様相が含まれる。第三に、人類学上に「戦争」を位置づけようとする類型である。この類型には、人類学や民族学なども参照しつつ「戦争」の起源を追求しようとする、佐原真氏が主導した研究^⑯や、マルクス主義や新進化主義の唯物的社会発展論に「戦争」や軍事組織を位置づけようとする、都出比呂志氏や松木武彦氏に代表される研究^⑰などが含まれる。

近年は、これらの方向性や方法にそって「戦争」研究を推進し

ていく際に、従来の文化史的考古学に基づく視座とは位相の異なる視座を用意する研究例がある。例えば、象徴・観念・心性などの側面に着目し、認知科学的方法や方法的個人主義の導入を提言する松木武彦氏^⑧や、軍事的な観点から武装システムや戦闘ドクトリンなどの分析を進める岡安光彦氏^⑨などの取り組みがあり、今後の展開が注目される。

① 松本武彦「考古学からみた『倭国乱』——弥生後々末期の社会状況——」『古代を考える 邪馬台国』、吉川弘文館、一九九六年、六九—九〇頁。酒井龍一「倭国大乱の考古学」『考古学による日本歴史』六戦争、雄山閣出版、二〇〇〇年、一五—三六頁、など。

② 佐原真「ヒトはいったい戦い始めたか」『歴博』第七号、国立歴史民俗博物館、一九九五年、六一—〇頁（金岡恕・春成秀爾（編）『戦争の考古学』佐原真の仕事四、岩波書店、二〇〇五年、一一—二頁、に再録）。

③ 大阪府立弥生文化博物館（編）『弥生時代の集落』、学生社、二〇〇一年。『古代文化』第五四巻第五号「特輯 弥生時代高地性集落研究の現状と課題」、（財）古代学協会、二〇〇二年。『古代文化』第五八巻第二号「特輯 弥生社会の群像——高地性集落の実態——」、（財）古代学協会、二〇〇六年、など。

以下の註では、各考古資料についての研究例を示すが、可能な限りの要件を備えているものをあげるよう意図した。第一に、その考古資料についての研究史を概観できるもの。第二に、一般書として刊行されており、入手しやすいもの。ただし、この要件を満たせなかったものも多い。

④ 橋本博文「日本における古墳時代首長層居宅研究の現況と課題——豪族居館および関連施設をめぐる——」『日韓集落研究の現況と課題（Ⅱ）』、日韓集落研究会、二〇〇六年、一五〇—一九〇頁、など。

⑤ 向井一雄「山城・神籠石」『古代の官衙遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編、奈良文化財研究所、二〇〇四年、二〇八—二二頁、など。

⑥ 石井進・萩原三雄（編）『中世の城と考古学』、新人物往来社、一九九一年。千田嘉博『織豊系城郭の形成』、東京大学出版会、二〇〇〇年、など。

⑦ 菊池実「近代日本の戦争遺跡 戦跡考古学の調査と研究」、青木書店、二〇〇五年、など。

⑧ 松本武彦「武器と戦いの研究史」『日本列島の戦争と初期国家形成』、東京大学出版会、二〇〇七年、一一—二〇頁、など。弥生・古墳時代の武器研究は日本考古学における「戦争」研究の中心的位置を占めており、研究例が膨大な上に細分化が著しく進んでいる。そのため、個別の研究例を取り上げることは困難である。松木氏による研究史整理は、戦前から一九九〇年代以降までを四期に区分し、その時期ごとの考古学研究の全体的な動向を踏まえた上で、各研究例の位置づけが丁寧になされている。

⑨ 阪口英毅（編）『馬具研究のまなざし——研究史と方法論——』、古代武器研究会・鉄器文化研究会、二〇〇五年、など。

⑩ 橋口達也「弥生時代の戦い 戦いの実態と権力機構の生成」、雄山閣、二〇〇七年。中橋孝博「北部九州における弥生人の戦い」『戦いの進化と国家の生成——人類にとって戦いとは——』、東洋書林、一九九九年、一〇一—一二〇頁、など。

⑪ 日本人類学会（編）『鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨』、岩波書店、一九九六年、など。

⑫ 田中晋作『百舌鳥・古市古墳群の研究』、学生社、二〇〇一年。藤

田和尊『古墳時代の王権と軍事』、学生社、二〇〇六年。松木武彦『日本列島の戦争と初期国家形成』、東京大学出版会、二〇〇七年、など。

⑬ 春成秀爾『武器から祭器へ』『戦いの進化と国家の生成』人類にとって戦いとは一、東洋書林、一九九九年、二二一―一六〇頁、など。

⑭ 藤田和尊『甲冑と甲冑形埴輪』『古代武器研究』第三号、古代武器研究会、二〇〇二年、五九―七一頁（『古墳時代の王権と軍事』、学生社、二〇〇六年、七七一―〇四頁、に再録、など）。

⑮ 田中晋作『古墳時代における軍事組織について』『古代武器研究』第九号、古代武器研究会、二〇〇八年、五一―六五頁、など。

⑯ はじめに―註①、第一章―註③、本章―註②。佐原真『世界の戦争考古学』『考古学による日本歴史』六 戦争、雄山閣出版、二〇〇〇年、一八七―一九五頁（金関恕・春成秀爾（編）『戦争の考古学』佐原真の仕事四、岩波書店、二〇〇五年、一四九―一六三頁、に再録）。

⑰ はじめに―註③。松木武彦『日本列島の武力抗争と古代国家形成』『国家形成の比較研究』、学生社、二〇〇五年、六一―七五頁。『日本列島の戦争と初期国家形成』、東京大学出版会、二〇〇七年、など。

⑱ 松木武彦『日本列島原始古代武器副葬の展開と社会的諸カテゴリーの形成―ステイタス・ジェンダー・エスニシティ―』『攻撃と防衛の軌跡』人類にとって戦いとは四、東洋書林、二〇〇二年、二一―三三頁。『戦争の生成と持続に関する考古学的展望』『文化の多様性と比較考古学』、考古学研究会、二〇〇四年、二二五―三三三頁。『考古学による戦争研究の新視点』『文化の多様性と二世紀の考古学』、考古学研究会、二〇〇四年、二二六―三五五頁、など。

⑲ 岡安光彦『古墳時代の軍事革命』『日本考古学協会第七一回総会研究発表要旨』、日本考古学協会、二〇〇五年、一七五―一七八頁。『白兵戦と日本考古学―二つの誤解―』『王権と武器と信仰』、同

成社、二〇〇八年、五七〇―五七六頁、など。

三 「戦争」研究の二例

前章までは、日本考古学における「戦争」研究の輪郭を優先して素描しようと試みたために、個別の考古資料や、個別の研究の方法・方向性などについて、詳細にふれることはできなかった。

本章では、「戦争」研究の中でも多くの蓄積があり、また活発な議論がおこなわれてきた二つのテーマを取り上げ、それぞれの概要を示したい。

「戦争」の起源

本稿でもこれまで何度かふれたとおり、佐原真氏が精力的に研究を推進したテーマである。人類学や民族学も含めて世界の研究例を渉猟し、狩猟採集民による「戦争」を認めつつも、農耕社会の成熟過程が本格的な「戦争」を生み出したことを強調した。研究の進展にともなって、定住化が集団暴力をもたらし要因となったとする説に接することとなったが、そこでいう集団暴力は「戦争」ではなく、突発的・偶発的なものと理解することにより、自説を修正するにいたっていない。これを日本列島にあてはめると、「戦争」は弥生時代における農耕社会の到来によって、はじめて生み出されたこととなる。この見解は、佐原氏の著作をおして広く受け入れられ、定説的な位置を占め

ているが、縄文時代に「戦争」の存在を想定する意見もある^②。また、「戦争」が本格化するのには、農耕開始期というよりは都市革命期だとする意見も提起されている^③。

佐原氏の見解の大きな特色は、人類の歴史の中で「戦争」の歴史はきわめて短いものであり、「戦争」は人類の宿命ではなく、それゆえに人類は「戦争」を捨て去ることができるとはずだという、現代社会に向けたメッセージを含んでいる点である。「戦争」の起源が文献史料の初現よりもさかのぼるとみられる現状においては、歴史学のほかの分野が、すでに存在しているものとの前提で「戦争」と向き合わざるをえない中で、このテーマの追求は、「物質的遺物」を扱うがために文献史料のない時代・地域をも研究対象としうる、考古学ならではのものといえるだろう。

古墳時代中期の軍事組織 おおむね五世紀に相当する古墳時代中期の軍事組織の研究は、古墳出土の鉄製武器・武器の編年・分布・出土状況などの検討を基礎として進められてきた^④。田中晋作氏は、武器・武器を中心とする副葬品の組成と出土状況を類型化し、「野中古墳型」の出現をもつて中期中葉頃に常備軍が成立したと想定する。藤田和尊氏は、冑・短甲・頸甲のセット関係の類型化から甲冑保有形態を検討し、中期中葉の「月の岡パターン」・中期後葉の「鶴山パターン」の存在が、それぞれ甲冑集中

管理体制の地方への拡散、そして在地化を示すものと想定する。松木武彦氏は、前期と中期の過渡期に武器様式から製作体制・保有形態におよぶ刷新を認め、それが武器の生産・供与の体制を軸とする軍事的機構の再編を背景に進行したと想定する。

このテーマを牽引する右の三名の研究者の間では、所説のほか、方法論や軍事組織のとらえ方にも見解の相違があり、かつて議論の応酬がなされた^⑤。もともと根本的な相違は、古墳副葬品を分析資料として利用するに際しての方法論的な問題にある。筆者もこれに関連して、副葬された甲冑は実用品であるか否かについて検討を加え、その大多数が実用品として製作されたと考えうる一方、器物としての性格は甲冑のライフサイクルの中で製作・配布・使用・副葬の各場面に応じて変化することから、それぞれの場面に即した解釈をおこなうことが望ましいと指摘したことがある^⑥。ここではまた、「甲冑を対象とした研究」（前章の「第一の類型」の研究）を十分に尽くした上で「甲冑を材料とした研究」（「第二の類型」の研究）を進める必要があることを強調した。

このことは、古墳時代の甲冑を主たる研究対象としている筆者が、必要性を強く感じながらも軍事組織の研究に踏み込めない理由の一つである。編年や生産組織の復元など、第一の類型の中で蓄積のある分野についても自身はいまだに区切りをつけられない

でいるが、例えば「甲冑の生産量、古墳被葬者の保有量、古墳への副葬量はそれぞれどれくらいか」といった、議論の前提となるべき問題についても、これまで明確に言及している研究例は少ない^⑦。また、保有形態の差違を評価する上で重要な位置を占める、「甲冑のセット関係に時期差が看取される場合、これをどのよう^⑧に解釈するか」といった問題についても、武装としての優劣という機能的な問題に還元する従来からの解釈があるほかは、久しく検討が進められることはなかった。最近、伝統の重視という観点からの解釈が提示されており、注目される^⑨。

「戦争」研究に限ったことではないが、軍事組織のように、それ自体が直接的な「物質的遺物」を残さない事象を対象として検討を進める過程では、いきおいさまざまな前提や仮定を積み重ねていかざるをえない。研究者は、それぞれ方法論を錬磨することにより、そういった不確定要素の数を減らし、蓋然性を高める努力を続けている。

① 第二章―註⑩。さらに吟味が加えられた上で、松木武彦『人はなぜ戦うのか―考古学からみた戦争』講談社選書メチエ二二三、講談社、二〇〇一年、などに継承されている。

② 小杉康「縄文化に戦争は存在したのか―棍棒をもつ社会―」『文化の多様性と比較考古学』、考古学研究会、二〇〇四年、二二五

―三四頁、など。

③ 都出比呂志「都市の形成と戦争」『考古学研究』第四四卷第二号、考古学研究会、一九九七年、四一―五七頁。都出氏は、城塞集落の出現を指標とする都市革命初期を弥生時代中・後期とし、城郭都市（都城）の出現を指標とする都市革命発展期を律令国家成立期としている。

④ 第二章―註⑫。

⑤ 松木武彦「古墳時代の武器・武具および軍事組織研究の動向」『考古学研究』第四一巻第一号、考古学研究会、一九九四年、九四―一〇四頁。『考古資料による軍事組織研究の現状と展望』『展望考古学』、考古学研究会、一九九五年、一四八―一五三頁。藤田和尊「古墳時代中期における軍事組織の実態―松木武彦氏の批判文に応えつつ―」『考古学研究』第四一巻第四号、考古学研究会、一九九五年、七八―九五頁。田中晋作「古墳時代中期における軍事組織について」『考古学研究』第四一巻第四号、考古学研究会、一九九五年、九六―一〇三頁。

⑥ 阪口英毅「古墳時代中期における甲冑副葬の意義―「表象」をキーワードとして―」『表象としての鉄器副葬』、鉄器文化研究会、二〇〇〇年、三二―五一頁。

⑦ 本章―註⑤、藤田氏文獻。水野敏典「日韓鉄器変遷にみる武器の解釈」『古代武器研究』第五号、古代武器研究会、二〇〇四年、六一―八頁、など。

⑧ 鈴木一有「古墳時代の甲冑にみる伝統の認識」『王権と武器と信仰』、同成社、二〇〇八年、七一―七二九頁。

おわりに

日本考古学における「戦争」研究の動向を示すことを目的に、「戦争」の考古学的定義を確認し、研究方法を概観した。今さらながらの言説に終始した感が強く、「戦争」研究の全体像を体系的に示すにはいたらなかった。また、二つのテーマについて概要を示すことにより、日本考古学における「戦争」研究の特質を浮かび上がらせることを目指したが、雑駁な記述にとどまったため、かえって理解を妨げる結果となつていることをおそれる。

なお、「戦争」の考古学的研究については、日本よりも海外での歴史が長い。本来であれば日本考古学に限定せず、世界の研究例を取り上げるべきであるが、筆者の力量不足のため果たせな

った。それらについては、佐原真氏や松本武彦氏の著作などを参照されたい^①。また、第二次世界大戦時に日本の考古学者が「戦争」とどのように向き合ったかという視点からの言及がいくつかある。これらも日本考古学における「戦争」研究の一環であろうが、本稿では「考古資料に基づいて」おこなう「戦争」研究を対象とすることとしたため、取り上げなかった。

きわめて不十分な内容ではあるが、いささかなりとも日本考古学における「戦争」研究の動向を紹介する役割を果たすことがかなうならば幸いである。

① 第三章―註①、第二章―註⑧。

② 坂詰秀一『太平洋戦争と考古学』歴史文化ライブラリー一、吉川弘文館、一九九七年、など。

（京都大学大学院文学研究科助教）